

9章

【第五の御使いのラッパ】(9章1~12節)

- 1 第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。
- 2 その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。
- 3 その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。
- 4 そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。
- 5 しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。
- 6 その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。
- 7 そのいなごの形は、出陣の用意の整った馬に似ていた。頭に金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった。
- 8 また女の髪のような毛があり、歯は、獅子の歯のようであった。
- 9 また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつけるときの響きのようであった。
- 10 そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には、五か月間人間に害を加える力があつた。
- 11 彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシヤ語でアポリュオンという。
- 12 第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。

●第一～第四までの御使いのラッパの記述がわずか1節、ないしは2節であったのに比べて、第五の御使いのラッパ以降、上記に見るように、多くの分量となっています。しかもそのさばきは明確に人に向けられるようになります。その前に、第一から第四までの御使いのラッパが吹き鳴らされた時の災いをまとめると以下ようになります。

第一のラッパ	8:7	地上	血の混じった雹と火によって、地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。
第二のラッパ	8:8~9	海	火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれて、海の三分の一が血となり、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。
第三のラッパ	8:10~11	川々	たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。
第四のラッパ	8:12	太陽・月・星	太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失った。

●「第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。」(9:1)とあります。ここにある「天から地上に落ちた一つの星」の「星」とは、原文では「彼」となっています。明らかにパーソンを意味しています。その正体は、「わたしが見ていると、サタンが稲妻のように天から落ちました。」とイエシュアが言われたことかもしれません(ルカ 10:18)。また、天に戦いが起こり、ミカエルとその使いたちが「巨大な竜」と戦った結果、地上に投げ落とされた全世界を惑わす悪魔とかサタンとか呼ばれる「古い蛇」のことかもしれません。いずれにしても、「その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた」のです。

●ちなみに、「底知れぬ穴」(黙示録 9:1, 3, 20:3)とは、底を意味する「ピュソス」という名詞に、否定を表わす接頭語がついた合成語「アピュツソス」(ἀβυσσος)です。底となるものが全くない、底なしの苦悩の場所を意味します。聖書はその場所を別名「ハデス」とか「シェオール」とも呼んでいます。不義なる死者がそこでよみがえりと最終のさばきを待つ、いわば「待合室」のような場所です。

●「ひとつの星」が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなるという驚くべきことが起こります。そしてその煙の穴から、いなごが出て来たのです。

●ヨエル書には、やがてエルサレムがさばかれることを表わすのに、「いなご」(蝗)による破壊力のすさまじさを象徴的に用いています。つまり、いなごによって国土が食い尽くされるように滅ぼされるということの意味します。黙示録 9 章のいなごには、「地のさそり」が持っているような「力」(「エクスーシア」ἐξουσία、自由に行動する権力)が与えられています。彼らには、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡されました。この時点から、サタンが反キリストを通して、地上で猛威をふるって活動する「大患難期」が始まると考えられます。

●さそりのような力を与えられた「いなご」は、額に神の印を押されていない人間だけを苦しめる力が与えられます。その期間は「五か月」です。つまり、150 日間。この期間はノアの洪水で地に水が満ちていた期間と同じです(創世記 8:3)。それは、人々が死の苦しみの中で、悔い改めて、神に立ち返るために与えられた猶予期間です。ですから、「人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。」です。そして、「その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行く」と記されています。あくまでも悔い改めを迫る神のあわれみのゆえに、苦痛から逃れて死ぬことができないのです。

●ヨハネは、幻の中で見た「いなご」の様子をいろいろな比喻で説明しています。

「出陣の用意の整った馬」

「金の冠」(征服者としてのしるし)

「人間の顔」(知性をもった存在)

「女の髪のような毛」(いなごの触角は乙女の髪にたとえられています)

「獅子の歯」(いなごの歯は緑の草や木の葉を食するだけでなく、樹木の皮もむさぼり食い尽くします)

「鉄の胸当て」(いなごの鱗状の脇腹と固い胸を指しています)

「翼の音」(いなごの大集団は重々しいとどろきを鳴り響かせ、それは馬に引かれて戦場に赴く多くの戦車のごとく)

「さそりのような尾と針」(苦痛の痛みを表わしています)



●黙示録 9 章 11 節によれば、いなごには彼らを指揮する王がいます。その王の名前がヘブル語で「アーバドーン」(אֲבֹדֹן)です。「滅びる」を意味する動詞「アーヴァド」(אָבַד)の名詞形で「滅び、底知れぬ場所」を意味します。ギリシア名では、同じく「滅ぼす」という動詞「アポツリユーム」(ἀπολλύμι)の分詞形「アポリュオン」(Ἀπολλύων)です。

【第六の御使いのラッパ】(9章 13～21節)

- 13 第六の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は神の御前にある金の祭壇の四隅から出る声を聞いた。
- 14 その声がラッパを持っている第六の御使いに言った。「大川ユーフラテスのほりにつながれている四人の御使いを解き放せ。」
- 15 すると、定められた時、日、月、年のために用意されていた四人の御使いが、人類の三分の一を殺すために解放された。
- 16 騎兵の軍勢の数は二億であった。私はその数を聞いた。
- 17 私が幻の中で見た馬とそれに乗る人たちの様子はこうであった。騎兵は、火のような赤、くすぶった青、燃える硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は、獅子の頭のように、口からは火と煙と硫黄とが出ていた。
- 18 これらの三つの災害、すなわち、彼らの口から出ている火と煙と硫黄とのために、人類の三分の一は殺された。
- 19 馬の力はその口とその尾とにあつて、その尾は蛇のようであり、それに頭があつて、その頭で害を加えるのである。
- 20 これらの災害によって殺されずに残った人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、
- 21 その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかった。

(1) つながれていた四人の御使いが解き放たれる

- 13節でヨハネが聞いたという「神の御前にある金の祭壇の四隅から出る声」とはいったい何なのでしょう。ヒントは6章9～11節にあります。その箇所には、金の祭壇の下にいる殉教者たちがいました。彼らは神のことばとあかしのために殺された人々です。彼らは祭壇の下で復讐を求めて祈っていたのですが、同じように殺されるはずの人々が満ちるまで待っていなさいと言われて待っていたのです。彼らの祈りの答えとして、主は「大川ユーフラテスのほりにつながれている四人の御使いを解き放せ」と命じたのです。
- 14節の「大川ユーフラテスのほりにつながれている四人の御使い」とはどんな御使いなのでしょうか。
  - ① 神の定められた時、日、月、年のために用意されていた一大川ユーフラテスのほりにつながれていた一御使い。
  - ② 「つながれていた」とは、敵の騎兵の軍勢(の数2億)が襲って来ないように、防波堤のような役割を果たしていたと考えられます。
  - ③ つながれていた御使いが解き放たれることによって、その結果、騎兵の軍勢によって、人類の1/3が殺された。殺されなかった人々は、悔い改めることなく、偶像を拝み続けていた。
  - ④ ここでの「四人の御使い」とは「殺戮の御使い」です。

(2) 二億の騎兵の軍勢について

- 騎兵の軍勢の数は二億。騎兵は赤、青、黄色の胸当てを着、その騎兵が乗る「馬」とは、私たちが考える馬のようではなく、その頭は「ししのよう」で、尾は「へびのよう」であり、その口からは「火と煙と硫黄とが出て」おり、その「火と煙と硫黄」による災害のために、人類の1/3が死ぬことになると思います。人を殺すのは騎兵ではなく、「馬」です。「馬」の口から出る「火と煙と硫黄」(三つの災害)が人を死なせるのです。9章19節の「馬の力」は、

その「口」にあります。

●9章の前半にある恐ろしいさばきと苦しみでは、人を殺すことは許されませんでした。9章の後半では、さらなる恐ろしいさばきが下り、人類の1/3が殺されます。ところが、これらの災害によっても、生き残った人々は自分たちの悪い行いを悔い改めないどころか、偶像を拝み続け、悪い行いもやめなかったのです。

●悔い改めようとしない人間の罪が、さらなる悲劇をもたらしているのです。苦難が警告として人を神に近づけるとは限らないということです。時によって、災害や苦難は、人を神からより遠くへと追いやることさえあると言えます。

●神の審判にもかかわらず、偶像礼拝と不道徳は、少しも勢力を減らすことなく継続されていることは、かつて預言者エリヤがバアルの預言者たちに勝利した後と全く同様です。アハブの妻イゼベルはその象徴的存在と言えます。

●エレミヤ書17章9節に「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」とあるように、それは今日の時代にも変わりません。人の心は最後までずっと邪悪な状態のままです。それゆえ、神がなんらかの恵みを一方的に注いでくださらなければ、だれひとりとして救われる者はないのです。

## 10章

【新改訳改訂第3版】

- 1 また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上には虹があって、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであった。
- 2 その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、
- 3 獅子がほえるときのように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのの音を出した。
- 4 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があって、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな」と言うのを聞いた。
- 5 それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて、
- 6 永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓った。「もはや時が延ばされることはない。
- 7 第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」

●さて、第六の御使いのラッパに引き続いて、第七の御使いのラッパに進みたいところですが、第七の御使いのラッパが吹き鳴らされるのは、11章15節以降です。10章からその箇所の前までは、第七(最後)のラッパが吹き鳴らされる前の準備的役割をもった挿入部分です。第六と第七のラッパの間には以下のように、二つの出来事が記されていますが、そこに入る前に、ダニエル書の12章にある預言を学んでおきたいと思います。なぜなら、ダニエル書12章と黙示録10～12章は密接な関係があるからです。

●ダニエル書12章1節には、「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上る。国始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。」とあります。ここでの「国始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る」とは、反キリストによる大患難時代のことを言っています。「あなたの民」とはイスラエルの民であり、「あの書」

とは、おそらく「いのちの書」のことであり、そこに「しるされている者はすべて救われる」のは、キリストの地上再臨の時と考えられます。その前に、イスラエルの民のために「大いなる君、ミカエルが立ち上り、イスラエルの民は救われる」(ダニエル 12:1)とは、黙示録 12 章 7 節以降にある天の戦いで、ミカエルと彼の使いたちが竜(悪魔、サタン、古い蛇)とその使いたちとが戦い、結局、竜とその使いたちは天から地上に投げ落とされることと関連しています。

●ダニエル書 12 章 7 節でダニエルは、川の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人(ここは御使いが人のかたちを取っています。ダニエル 9 章 21 節に登場するガブリエルという御使いも「人」と呼ばれています)が、「その右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方をさして誓って言います。「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。」と。「ひと時とふた時と半時」とは、三年半であり、七年間続く患難時代の半分に当たります。黙示録ではこの「三年半」の期間のことを、「ひと時とふた時と半時」という言い方をせず、「四十二か月」(11:2)、あるいは、「千二百六十日」(11:3/12:6)という表現で言い表されます。黙示録 10 章に登場する「もうひとりの御使い」も神を指して誓います。「**もはや時が延ばされることはない**」(10:6)と。この箇所の原文は「もはや時がない」となっています。つまり、預言者たちが前もって語って来たことがまもなく成就することを意味しています。その前に第七の御使いのラツパが吹き鳴らされますが、それは黙示録 11 章 15 節以降に記されており、「第三のわざわい」がはじまるのです。ちなみに、「第一のわざわい」は黙示録 9 章 1~11 節に記されている「いなごの災害」で五か月間の苦しみが与えられました。「第二のわざわい」は人類の三分の一が殺されるというものです(9:13~21)。

●第七の御使いのラツパが吹き鳴らされるその日には、「神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する」(黙示録 10:7)とあります。実際に、第七の御使いのラツパが吹き鳴らされるのは、11 章 15 節ですが、その前に黙示録 10 章 1 節~11 章 14 節が挿入されているのです。その挿入部分に登場するのは大きく分けて二つのことです。それは、小さな巻き物をもった「もうひとりの強い御使い」の登場と、もう一つは「二人の証人」です。

## (1) 小さな巻き物をもった「もうひとりの強い御使い」(10 章 1~11 節)

### ① 御使いの宣言—「もはや時が延ばされることはない」

●「もうひとりの強い御使い」は 10 章 1 節のみならず、18 章 1 節にも登場します。すでに、5 章 2 節でも「ひとりの強い御使い」が登場していました。いずれも大声で叫んでいるのです。10 章 2 節では、その「もうひとりの強い御使いの手には「小さな巻き物」を持っていました。なぜ「小さい巻き物」なのでしょう。おそらくこの時点では、すでに七つの封印のさばきが成就し、六つのラツパのさばきも成就したからだと考えられます。

●この「もうひとりの強い御使い」によって、「もはや時が延ばされることはない」と宣言されます。つまり、それはイスラエルに関して定められた「時」は終わったことを意味します。

### ② 右足を海の上に、もう一方の左足を地の上に置く御使い

●この「もうひとりの強い御使い」は、右足を海の上に、もう一方の左足を地の上に置いています。そのことが 10 章になんと 3 回も繰り返されています(2, 5, 8 節)。足を「海」と「地」の上に置くとは象徴的な行為です。その意

味は 13 章にヒントがあります。そこでは「海」から上ってくる一匹の獣(13:1)と、「地」から上ってくるもう一匹の獣が登場するからです(13:11)。前者の獣は「反キリスト」のことであり、後者の獣は「にせ預言者」のことであり、「海」と「地」は、文字通りの「海」と「地」ではなく、おそらく、「海」とは異邦人を表わし、「地」とはイスラエルを表わしていると考えられます。重要なことは、御使いの足の片方が海の上に、もう一方の足が地の上に置かれることによって、神の王国の権威を傲慢にも奪おうとする「海」と「地」をキリストの永遠の支配の日のために、つまり神の民が神に立ち帰らせるための道具として、最後まで保たれることを示唆しているように思われます。この二つの獣のことは、後に、13 章で詳しく学びます。

### ③ 小さな巻き物を食べたヨハネ

【新改訳改訂第 3 版】

10:8 それから、前に私が天から聞いた声が、また私に話しかけて言った。「さあ行って、海と地との上に立っている御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取りなさい。」

10:9 それで、私は御使いのところに行って、「その小さな巻き物を下さい」と言った。すると、彼は言った。「それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」

10:10 そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。

10:11 そのとき、彼らは私に言った。「あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない。」

●ヨハネは「海と地との上に立っている御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取るように」という天からの声を聞き、御使いのところに行ってそれを受け取ると、御使いは「小さな巻き物を食べよ」とヨハネに命じます。

それを食べた時、最初は口に甘かったのですが、腹に入ると苦くなりました。巻き物を食べると口の中で蜜のように甘かったという経験をエレミヤもエゼキエルもしています(エレミヤ書 15 章 16 節、エゼキエル書 3 章 3 節を参照)が、それが腹に入ると苦くなったというのはヨハネだけです。これはどういうことでしょうか。

●「終わりの日」についての神の啓示について学ぶこと、御国の支配とその奥義を知り、それがどのようにして成就するかを知ることを、聖書は「巻き物を食べる」という言い方で表現しています。それは非常に甘いことなのです。それによって、安心し、心の平安を保ち、それを待ち望み、確信をもって主に従っていくことができるからです。しかし同時に、喜んでばかりもいられないのです。なぜなら、そのようなすばらしい神の支配が到来する前に、恐ろしいことが起こらなければならないからです。その恐ろしい内容を知ることが「苦くなった」と表現されているのです。それでもヨハネは最後の預言者として、「あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない。」と主から語られたのです。

## 11 章

### (2) 二人の証人(11 章 1~14 節)

#### ① 神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人の存在

11:1 それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。

11:2 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにじる。

●「二人の証人」について書かれているのは 11 章 3～13 節です。その前の箇所(1～2 節)には、ヨハネに「杖のような測りざお(直訳では「葦」)」が与えられて、「神の聖所と祭壇と、そこで礼拝している人を測れ」と命じられています。命じているのは文脈を考えると御使いです。ここで、聖所と祭壇のみならず、そこで礼拝している人を測るということは何を意味しているのでしょうか。

●かつて、エゼキエルもやがて千年王国の時代に建設される、神の聖なる神殿を測ることを命じられました。そのことがエゼキエル書 40～42 章に記されています。しかし、黙示録 11 章にある「聖所と祭壇」というのは、千年王国の神殿の事ではなく、患難時代に建てられる第三神殿のことだと考えられます。聖書によれば、やがて「荒らす憎むべき者」(反キリスト)が、立ってはならない「聖なる所」に立つようになります(マタイ 24:15)。そして彼は「すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します」(Ⅱテサロニケ 2:4)。患難時代にエルサレムに第三神殿が再建されるということが、聖書のさまざまな聖句を照らし合わせることで分かります。

●最後の第七の御使いのラッパが吹き鳴らされると反キリストが出現しますが(13 章)、その前の患難時代の前半(3 年半)に、あっという間に神殿は再建されると考えられます。イスラエルの人々は、反キリストと結んだ契約に基づいてその神殿を建設するでしょう。しかし三年半後に、つまり、患難時代の中頃に反キリストは突然その契約を破棄し、神殿において、自分を神として拝むことを強要するようになります。このことはダニエルもイエシュアも、そしてパウロも記している事です。反キリストは神と呼ばれるすべてのものに反抗し、自分を神として、神殿の中に自分のための座を設けるのです。

●ヨハネが聖所と祭壇と礼拝者たちを測るのは、それまで敬虔な思いをもって神のために、神に関する事柄を保とうとしているユダヤ人がいるからです。ここでいう「聖所と祭壇」というのは、「聖所の中にある香壇」のことだと考えられます。なぜなら、いけにえのための祭壇は聖所の外に置かれますが、「外の庭、異邦人に与えられている」(2 節)と記されているからです。その異邦人たちが「聖なる都を四十二か月の間踏みにじる」(ここでの四十二か月は患難時代の後半と考えられます)とあります。ですから、そこはそのまま「差し置き」、測ってはならないと命じられています。「差し置き」という命令(アオリスト)は、「投げ出しなさい、無視しなさい」という意味です。

●地上に第三神殿が建てられるのはユダヤ人のためです。しかもそれはおそらく反キリストの力によって実現されると考えられます。しかしその本意は、やがて明らかになるように、神の民であるユダヤ人を滅ぼそうとするためですが、それはまた同時に神の側からするならば、神が再びイスラエル民族を選民として最終的に取り扱おうとしておられるためでもあるのです。ちなみに、この時期には教会はすでに携挙されており、地上にはありません。

## ② 二人の証人

新改訳改訂第 3 版 黙示録 11 章 3～13 節

3 「・・・それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」

## ヨハネの黙示録を味わう

- 4 彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。
- 5 彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。
- 6 この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。
- 7 そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。
- 8 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。
- 9 もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。
- 10 また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。
- 11 しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常に恐怖に襲われた。
- 12 そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。
- 13 そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。

●終わりの時に、神である主は、かたくななユダヤ人たちの心を開かせて、メシア・イエシュアを受け入れさせる準備をされます。そのために突如、油注がれた(神の力を賦与された)「ふたりの証人」が現われているのです。おそらくモーセとエリヤのような大預言が現われて罪を悔い改めて神に立ち返るように迫るものと思われます(マラキ 3:1~4)。

●この「ふたりの証人」の働きの期間は、文字通り、1260日です。これは42ヶ月(ひと月を30日で計算)、それは三年半に相当します。彼らの働きの帰還はダニエルの最後の一週(7日=7年)における前半に当たる期間です。彼らの働きを阻止しようとする者があれば、彼らはその者に対して容赦なく、神の超自然的な力によって死に至らせます。この「ふたりの証人」が預言している期間、彼らには雨が降らないように天を閉じる力も持っていました。また、あらゆる災害をもって思いのまま、地を打つ力が与えられていました。それはひとえに神の民であるイスラエルの民を救いに導くためでした。しかしユダヤ人のみならず、異邦人もこの「ふたりの証人」を拒絶します。

●7節、定められた三年半の間、彼らは神の完全な保護の下であかしの働きを全うしますが、時が来て「彼らがあかしを終えると」、今度は敵が彼らに打ち勝つこととなります。「底知れぬ所から上ってくる獣」が彼らと戦って、彼らをいとも簡単に殺してしまいます。この獣こそ、竜(サタン)から権威を授けられた「反キリスト」です。そして殺された「ふたりの証人」の死体は、おそらく「主もその都で十字架につけられた」とあるので、エルサレムにさらされると考えられます。9~10節には、「もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体

をながめていて、・・彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う」とあるので、おそらく全世界の人々がテレビの衛星中継によって彼らが死んだことを知り、そのことを喜び祝って、互いに贈り物を贈り合うということが起こります。なぜなら、このふたりの預言者が数々の災いをもって、地に住む人々を苦しめたからです。彼らは「ふたりの証人」が死んだことで大喜びすると同時に、彼らを殺した反キリストのことをあたかも自分たちの救い主(メシア)のように歓迎するようになると考えられます。それほどに、「ふたりの証人」の存在は、罪の生活を楽しんでいる人々にとっては迷惑千万な存在、うざい存在だったのです。

### ダニエル書 七十週の預言



●ところが、喜んでいるのも束の間。11節「しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常に恐怖に襲われた」のです。おそらくこのことも全世界に衛星中継されると考えられます。主イエスが死んで三日後に復活したように、「ふたりの証人」三日後にもよみがえり、敵の目前で雲に乗って天へと引き上げられます。この「ふたりの証人」が天に上げられる際に大地震が起こります。この地震によって、エルサレムでは七千人の者が死にます。そこで「生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた」とあり、事態は全く逆転してしまいます。しかし、このことがユダヤ人の民族的回心につながるのです。これを見た反キリストも黙ってはいません。反撃に出るのは言うまでもありません。

●突如として現われた「ふたりの証人」は、神の民であるイスラエル(ユダヤ人)を救いに導くためであったのです。それは次の千年王国において、神の彼らに対する約束が成就した後に真の神殿をが再建され、そこに彼らを置くためなのです。これらのことは、まだ歴史上には起こっていない将来の出来事ですが、想像もできないような神のドラマが展開していくのです。しかし、信仰とはまだ起こっていないことを、あたかもすでに起こったかのように確信することです(ヘブル 11:2)。そしてこうした信仰は称賛されるべき信仰なのです。



【第七の御使いのラッパ】

●「第七の御使いのラッパ」が吹き鳴らされるさばきは、実際には七つの鉢のさばきです。それを 11 章 14 節では「第三のさばき」とも呼んでいます。そして、その「第三のさばき」(七つの鉢のさばき)の具体的内容は 15 章～16 章に記されています。

●12 章 1 節から 14 章 20 節までの三章にわたる長い間奏曲は、「七つのヴィジョン」と呼ばれ、神とサタンとの戦いの真相が記されています。その「七つのヴィジョン」の内容のアウトラインは以下の通りです。

- ①「女と竜」(12:1～6)
- ②「竜の敗北」(12:7～17)
- ③「海からの獣」(13:1～10)
- ④「地よりの獣」(13:11～18)
- ⑤「シオンの山に立つ小羊と十四万四千人」(14:1～5)
- ⑥「三人の御使い」(14:6～13)
- ⑦「収穫の時」(14:14～20)

この部分(12～14 章)こそ黙示録の本核であると解釈する人もいます。なぜなら、患難時代における地上のさまざまな出来事はいずれも天(霊的)な世界の戦いが背後にあり、その現われであるからです。そして、そこに登場するのは、イスラエル、サタン、キリスト、イスラエルの残りの者(14 万 4 千人)、ミカエルという御使いのかしら、反キリスト、にせ預言者の七人です。

●ちなみに、

「第一のさばき」(第一～第五の御使いのラッパによって) 8:7～9:12

「第二のさばき」(第六の御使いのラッパとともに) 9:13～11:14

「第三のさばき」(第七の御使いのラッパとともに) 11:15～11:19、15:1～16:21

●15 章～16 章には「七人の御使いによる最後の七つの災害」が記されて事は成就します。

ここで、11 章 19 節と 16 章 17～21 節を読み比べてみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】

11:15 第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」

11:16 それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、

11:17 言った。「万物の支配者、今いまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。

11:18 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。」

11:19 それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いなくま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。

## 13章

### 「海からの獣」(13:1~10)と「地からの獣」(13:11~18)

●終わりの時代に二つの獣が登場します。一つは海から上がってくる獣、もう一つは地から上がってくる獣です。この二つの獣が象徴しているものは何か、その働きは何かに注目します。

●海から上がってくる第一の獣は、ひょうに似て、熊の足を持ち、ししの口を持つ猛獣です。竜、すなわちサタンが、この獣に力と権威を与えたとあります。また、口を開いて神を汚したとありますから、神に対して戦いをいどむ存在(単数)、すなわち、反キリストのことを意味しています。

●では、地から上がってくる第二の獣とはなんでしょう。その特徴と働きが13章11~16節に記されています。

- ①「小羊のような二本の角がある」(11節)
- ②「竜のようにものを言った」(11節)
- ③「最初の獣が持っているすべての権威を・・・働かせた」(12節)
- ④「地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた」(12節)
- ⑤「人々の前で、・・・大きなしるしを行った」(13節)
- ⑥「しるしをもって地上に住む人々を惑わした」(14節)
- ⑦「剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように命じた」(14節)
- ⑦「獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことができるようにした」(15節)
- ⑧「その獣の像を拝まない者をみな殺させた」(15節)
- ⑨「・・・すべての人々に・・・刻印を受けさせた」(16節)



## 反キリストによる全世界の支配

### (1) 反キリストの本領を発揮し、自分を神と宣言して拝ませる

●悪の三位一体でのサタンは「竜」という象徴で表わされ、「反キリスト」は「獣」という象徴で表わされます。ヨハネの黙示録13章2節には「竜はこの獣に、自分の力と大きな権威とを与えた」と記されています。そして、「この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月(三年半)活動する権威を与えられた。」とあります(黙示録13:5)。ただしこの四十二か月は、一週の後半の三年半です。最後の一週(七年間)を「患難時代」と呼びますが、特に、後半の三年半を「大患難期」と言います。

#### Ⅱテサロニケ2章2~4節

2:2 主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。

2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。

2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、

自分こそ神であると宣言します。

●4 節に「神の宮」とあることから、第三神殿がすでに建っていると考えられます。そこに自分の座を設けて、自分が神であることを宣言するのです。それは後半の三年半の「大患難期」の始まりです。しかし注目すべきことは、反キリストがサタンの化身として本領を発揮できるのはわずか三年半だけだということです。とはいえ、人類はこの三年半だけでも、獣を神として拝んだ愚かさを十分に経験させられることになるのです。

黙示録 13 章 7～8 節

7 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。

8 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。

## (2) サタンの「6」という数字に対する愛着

●サタンは自分の化身である反キリスト(獣)を通して、全世界を自分の支配下に置きます。つまり「獣の独裁政治」となります。偽預言者はこの獣を拝まない者をみな殺させ、すべての人々に、その右手かその額に獣の名、あるいは、その名の数字(666)の刻印を受けさせ、その数字の刻印を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることでもできないようにします(黙示録 13:15～17)。つまり、この刻印を受けていないと社会システムの中では生きられないということです。この刻印を受けるということは、反キリストが神であることを自ら認めたことを意味します。ですから、知らずに刻印を受けていたということはありません。それゆえに、刻印を受けることは神の怒りにふれることとなります。

●ところで、この「666」という獣の数字はとて有名です。何ゆえに「666」なのでしょう。それは、言葉(文字)を数字に変えることで、深い意味をもたせている数の暗号(ゲマトリア)です。6 は、三位一体の第 1 位格、第 2 位格、第 3 位格の数 1, 2, 3 の合計に等しい数です。かけ合せたものにも等しい数です。6=1+2+3、6=1×2×3 つまり、サタンは明らかに 6 という数字を用いて、三位一体なる神の真似をしようとしているのです。さらに、イエシュアはサタンを「偽りの父」と呼びました(ヨハネ 8:44)。「父」のヘブル語は「アバ」ですが、それをギリシア語表記にすると αββα となり、これを数字に変換すると 1+2+2+1=6 となります。

●サタンは「偽りの父」です。神の真似をしようとしているのです。サタンは 6 や 666 を好んで用います。たとえば、バビロンの王ネブカデネザルは、金の像を作り、それを拝ませようとしていました。その金の像の高さは 60 キュビト、幅は 6 キュビトでした(ダニエル 3:1)。またこの偶像のまわりではさまざまな楽器が演奏されましたが、その楽器の数は 6 つでした(ダニエル 3:5)。そして、終わりの日の反キリスト(獣)の後半の活動期間である 42 ヶ月(三年半)も、42=6×6+6 で表わすことができるのです。

●「刻印」(「カラグマ」 χάραγμα)ということばは黙示録では 7 回使われています(13:16, 17/14:9, 11/16:2/19:20/20:4)。この獣の刻印をひとたび受けた者は決して救われることはできません。彼らはひどい悪性のはれものに悩まされ、やがては火と硫黄で永遠に苦しめられます。しかし、この獣を拝まず、この獣の刻印を押されなかった人たちは、当然、殉教しますが、彼らは千年王国においてよみがえり、キリストとともに千年の間王となることが預言されています(黙示録 20:4)。「獣」が現われる時には、多くの人から「救世主」のようにあがめられる存在となります。まさに平和を実現する者として人々から歓迎されます。ユダヤ人の指導者とも七年の平和条約を結びますが、その平和は偽りです。ひとたび「獣」が世界の権力を握ると身を翻して、契約を破り、自らを神とします。

## 14章

●12章1節から14章20節までの三章にわたる長い間奏曲は、「七つのヴィジョン」と呼ばれ、神とサタンとの戦いの真相が記されています。その「七つのヴィジョン」の内容のアウトラインは以下の通りです。今回、扱うのは、⑤～⑦の部分です。

- ①「女と竜」(12:1～6)
- ②「竜の敗北」(12:7～17)
- ③「海からの獣」(13:1～10)
- ④「地よりの獣」(13:11～18)
- ⑤「シオンの山に立つ小羊と十四万四千人」(14:1～5)
- ⑥「三人の御使い」(14:6～13)
- ⑦「収穫の時」(14:14～20)

●14章全体は、小羊とそれに従う者たちの勝利と邪悪な者に対するさばきを確信させてくれる章です。

### (1) 「シオンの山に立つ小羊と十四万四千人」(14:1～5)

【新改訳改訂第3版】

14:1 また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあった。

14:2 私は天からの声を聞いた。大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった。

14:3 彼らは、御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、新しい歌を歌った。しかし地上から贖われた十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかった。

14:4 彼らは女によって汚されたことのない人々である。彼らは童貞なのである。彼らは、小羊が行く所には、どこにでもついて行く。彼らは、神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。

14:5 彼らの口には偽りがなかった。彼らは傷のない者である。

●まず、14章1～5節に限定して、そこに記されていることを整理してみたいと思います。

●14章1節では、小羊が14万4千人の人と共にシオンの山の上に立っている幻が記されています。

- ① 小羊が14万4千人の人と共にシオンの山の上に立つ幻が実現するのはいつの時か。
- ② シオンの山とは天にあるシオンの山か、あるいは、地上にあるシオンの山か。
- ③ 14万4千人の人々は、黙示録7章に登場する14万4千人と同じ人々か。あるいは、異なる人々か。
- ④ 3～5節の「彼ら」とはだれのことか。
- ⑤ 「彼ら」とはだれのことか、「彼ら」の特徴は何か。

●これらについての解釈をめぐる、見解がさまざまです。いずれの解釈にしても、全体との整合性が取れるもので

なければなりません。

- ちなみに、ここで、7章の14万4千人と14章の14万4千人とが同じ人々であるかどうか検証してみましょう。

7章	14章
イスラエルの部族から選ばれた人々	地上から贖われた人々(3節)
	神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われた(4節)
額に(神の)印を押された	額に小羊の名と、小羊の父の名がしるされた(1節)
神のしもべたち	神の子どもたち(?) 一父という名が類推して—
	御座と、四つの生き物、および長老たちの前とで、新しい歌を歌った(3節)
	女によって汚されたことのない人々。童貞である(4節)
	小羊の行くところにはどこにでもついていく人々(4節)
	彼らの口には偽りがなく、傷のない者であった(5節)

- 検証の結果をまとめてみよう。

---



---



---

## (2) 「三人の御使い」(14:6~13)

14:6 また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。

14:7 彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

14:8 また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

14:9 また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、

14:10 そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。

14:11 そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。

14:12 神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける聖徒たちの忍耐はここにある。」

●14章6～12節には、三人の御使いのそれぞれの働きが記されています。

第一は、あらゆる人々(異邦人)に永遠の福音を宣べ伝える御使い

第二は、バビロンの崩壊を宣告する御使い

第三は、獣を拝む者たちに対するさばきを宣告する御使い

●13節で記されているのは、大患難時代において信仰のゆえに殉教する聖徒たちに対する保証が述べられています。

14:13 また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』」

御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについて行くからである。」

●この箇所はしばしば葬儀の時に読まれる箇所ですが、コンテキストを考えるなら、的外れということになります。

### (3) 「収穫の時」(14:14～20)

【新改訳改訂第3版】

14:14 また、私は見た。見よ。白い雲が起り、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。

14:15 すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗っておられる方に向かって大声で叫んだ。

「かまを入れて刈り取ってください。地の穀物は実ったので、取り入れる時が来ましたから。」

14:16 そこで、雲に乗っておられる方が、地にかまを入れると地は刈り取られた。

14:17 また、もうひとりの御使いが、天の聖所から出て来たが、この御使いも、鋭いかまを持っていた。

14:18 すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」

14:19 そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。

14:20 その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。

●14節の「雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。」とはキリストの再臨の光景です。マタイの福音書13章24～30節にあるイエシュアの語られたたとえ話が実現するときと考えられます。つまり、収穫の時期になったとき、地の穀物は刈り入れられ、毒麦も集められてさばかれるのです。これらは、メシア王国である千年王国の始まる直前に起こる出来事なのです。

●17～20節は、地上における最後のさばきのことで、未信者たちにもたらされるさばきです。20節の「その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。」とあります。これは、バビロン(イザヤ)の戦いを指していると考えられます(黙示録16:16、エゼキエル39章、ヨエル書3章、ゼカリヤ12章参照)。

●「千六百スタディオン」とは、296Kmの距離です。この距離はイスラエルの北から南まで、あるいは、エルサレムからアラビアにある「ボツラ」(イザヤ63:1)までの距離に匹敵するようです(現在はヨルダンのペトラ)。